

第2回福山市幼保小連携教育合同研修会

2023(R5)2.13(月) 14:40~15:40

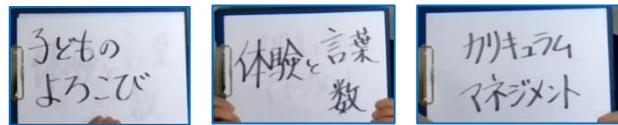
「一人一人の育ちと学びがつながるカリキュラム ～新年度を前にした連携の実際～」

講師：安田女子大学・短期大学 朝倉 淳 客員教授（福山市幼保小連携教育推進アドバイザー）

光小・緑丘小学校区の取組で大事にしたいこと

光小・緑丘小学校区の発表はとても素晴らしく、私自身も大変勉強になりました。良いところがたくさんありましたので、これから大事にしたいことをお話します。

- 1 子どものよろこび
- 2 体験と言葉・数
- 3 カリキュラムマネジメント



この3つのことについて、2校区の発表から、その良さを共有していきたいと思います。

* 子どものよろこび *

2校区の発表に共通して、「交流活動」の場面がありました。交流活動は、子どもたちにとって楽しみな活動です。活動が進む過程で、自分たちが楽しむことから園児が楽しむことを楽しむことに変わっていく、園児が楽しむことが喜びになっていくという姿が見られました。

私たちが子どもたちも社会的な生き物です。自分の喜びが、他の人の喜び、楽しみに繋がっていくことが、ある意味最高の喜びです。それを子どもたちが実感できるような交流活動になっていたことは、本当に大事なことだと思います。自己肯定感などを一層強くすることにも繋がり、交流活動の成果が強く得られている取組だと思いました。

* 体験と言葉・数 *

言葉は座学で、あるいは辞書を見て頭の中に入れていくものではありません。本を読むことは大事です。しかし、本を読めば単純に言葉が頭の中に入れていくわけではありません。ベースとなる体験がとても大事です。

幼児期において、様々な遊びや日常生活の中で、いろんな言葉と数に出会い、操作し、理解し、使っていきます。そのことが児童期にも繋がっていきます。その際、特に低学年においては、実際の体験とともに言葉や数を獲得していきます。そのことの大切さを両校とも示していました。これは、是非学びたいところです。小学校に入ったのだから、数は数、言葉は言葉で、座学の中で学べば良いということではありません。体験とともに言葉と数を獲得する過程を大切にしている取組が素晴らしいと思います。よく連携・接続されていると思いました。



本日の題目は「一人一人の育ちと学びが繋がるカリキュラム」です。この時期ですので、新年度を前にした連携の実際も意識しながら考えていきたいと思います。

今、何をどう連携するか。

- 1 様々な成長の姿を共有する
- 2 困難な現実と異変を共有する
- 3 連携により保育・教育の充実を図る

この3点について考えていきます。

様々な成長の姿を共有する

小学校においても園所においても、子どもたちは日々チャレンジしながら成長していきます。チャレンジをするためには、安心が大事ということはこれまでも繰り返し言われ、スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの基本でもあります。子どもたちは、遊びと生活を通して経験を広げ深め、いろんなことができるようになります。その様々な成長の姿を共有することが大事です。

* 園の子どもたちの姿 *

子どもたちの姿は、自由に素直に見ていくといいと思います。連携にあたっては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」通称「10の姿」を手がかりに、子どもたちの姿を理解し、共有していくといいです。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- (1) 健康な心と体
- (2) 自立心
- (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え
- (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- (9) 言葉による伝え合い
- (10) 豊かな感性と表現

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標ではありません。「小学校に入学するまでに、一人一人の子どもたちが同じようにこの『10の姿』ができていますよ」「それを目指しますよ」ということではありません。

そもそも一人一人の個性や経験は違いますし、入学した時点で6歳になったばかりの子どもと、もうすぐに7歳になる子どもといます。月齢差もあり、随分いろんな違いがあります。その中で、子どもたちの姿を見ていく手がかりとして、「例えばこんな姿で捉えていくとどうでしょうか」というものが「10の姿」です。



この写真は、幼稚園で子どもたちが遊んでいる姿です。園の後ろにある森も、園の一部です。たまたまそういう環境にある園です。

この写真の子どもたちは、森の小道を列になって進んでいます。こんな道ですから、子どもたちは足元を見たり、左右を見たり、何かにつかまったり、掴んだり、確かめたりしながら、前へ前へと進んでいきます。私たちは動物ですので、

日々、動いているわけです。動いていくと環境が変わっていきます。その環境に合わせ、私たち

はいろいろなことを調整していきます。調整するためには、全身の感覚を使って情報を集め、その情報に合わせて、一步を踏み出したり、何かを掴んだり、においを感じたり、危険を感じたり、面白そうなものを見つけたりしていきます。幼児期にそれぞれの園や家庭生活等を通じて、このようなことが十分に展開されることが大事です。コロナ禍の状況も含め、いろいろなことを体験しにくい状況になっています。デジタル化も進んでいく中、幼児期の経験が一層大切になると考えられます。



これは落ち葉を集めて、フカフカな感覚を楽しんでいる写真です。この中で、いろんな会話が行われています。一緒に過ごす楽しさを感じる体験の中で、いろんな言葉を発し、いろんな言葉に触れ、いろんなストーリーを作っていくことが大事です。3人の後ろにいる子どもも、何かやっていますよね。きっと、この子のストーリーがあると思います。



コロナ禍で、楽しい体験をすることが難しい状況にありました。そのような中でも、「園の中で何か楽しい活動がしたい」と思い、年長の子どもたちが「お店をいっぱい開いて、パーティーをしよう」と考えました。

これは「おいしいカフェやさん」の写真です。他にも、アクセサリー屋さんなどのお店があり、商店街にある抽選機

のガラポンまでありました。そんな活動が展開していました。楽しいですよ。年長さんのすごい企画力です。少し先を見通し、イメージを持ちながら準備をしていき、様々なものを作っていきます。何日もかけて準備をし、作り上げていく1つのプロジェクトは、探究そのものです。実際にお店を開く中で、いろんな言葉のやりとりもあります。年中さんに楽しんでもらうことも、大きな喜びになります。このような活動そのものが、現実社会の鏡だと思います。この中で、言葉や数を獲得し、社会の営みを理解し、そして新しい社会をつくっていく力を自らが育てていると思います。



これは、コンサートごっこをしている写真です。これも社会の鏡です。コンサートごっこをするにあたって、コンサートのイメージがあって、それを話し合いながら、物を作りながら、変更しながら、いよいよコンサートが開かれます。年中さんが、お客さんで来ています。実は、ここに写っていない年中さんが後ろにもいます。そして、この横の方でお菓子を準備したり、ジュースを作ったりしている子どもたちがいます。もちろんお菓子やジュースは本物ではなくて、自分たちが作ったものです。それを配る準備をしている子どもたちがいます。ジュースを担当している子どもが、ジュースをいっぱい作っていました。その子が、コンサートに来た年中さんの数を一生懸命数えるんです。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10と数えていきま

す。10を超えて、11、12、13、14まで数えました。14であっているかと疑問に思い、もう1回数えます。1、2、3、4、5…。様子を見ていると、その後も何回も数えていました。なぜ何回も数えるのか。自分たちが準備したジュースの数が、見に来てくれた年中さんに対して、足りるのかどうなのかがとっても心配だからです。足らなかつたら大変だという責任感でもあり、楽しんでもらいたいという気持ちでもあります。それで数を一生懸命数え、ジュースの数と年中さんの数、「どっちが多い?」「ぴったり?」「足りない?」ということはずっと言っていました。その後、足りることがわかり、みんなに配っていました。この活動を通して、言葉に出あったり、数に出あったり、使ったりしながら、全体としてのプロジェクトが進行し、展開しています。

子どもたちは、このような企画力、構成力をすでに持っています。もちろんみんな一様ではなく、いろいろです。しかし、全体としてこのようなことをする子どもたちが、小学校に入学してきます。その力や経験を生かして、小学校での学びを進めていくことが大切です。

* 小学校の子どもたちの姿 *

小学校の子どもたちの姿も同様です。日々チャレンジを続けていきます。児童も安心が大切です。学びと生活を通して、経験を広げ深め、いろんなことができるようになります。突然できるようになるわけではなく、乳幼児期のいろんな活動、遊びを経て、小学校に入学し、いろんなことが一層できるようになります。それから先にもずっと繋がっていきます。

「小学校から学びが始まるのではない」という考え方は、もう今や当たり前になっています。かつては、私自身の反省も含め、あたかも小学校から始まるような錯覚をしていたかもしれません。そうではないということを、今、共有できていることが、とても良いことだと思います。乳幼児期から小学校、中学校、さらにその先へ繋がっていくことが確認されるようになりました。

学校の近くの川の様子や住んでいる生き物を季節ごとに模造紙にまとめた掲示物

これは、小学生の子どもたちが作ったものです。総合的な学習の時間に、学校のすぐ横の川を学習材として取り組んでいます。

これは春の様子です。亀がいますね。このような学習は、突然始まるわけではありません。この学習で初めて亀と出あったわけではなく、ずっと前に出あいがあり、ここに繋がっ

てきています。夏になると、子どもたちが春から夏にかけて成長した様子がわかります。まとめ方や表現の仕方も、乳幼児期から繋がっている学びです。この写真の生き物の絵は、とても生き生きとしていると思います。虫や生き物が大好きな子どもたちがいて、図鑑を見ながら、実物を見ながら、すごい絵を描く子どもたちがいます。人それぞれ、いろんな得意なことがあります。その得意なことがいろんな形で生きてくるのが大事で、そのことが小学校での学びを成立させるのだと思います。

冬になると、さらに一層学習が進んでいます。「川がきれいなのか汚いのか」というような表現をしたり、本を作ったりしています。このような子どもたちの様々な成長の姿を共有することが大事だと思います。

困難な現実と異変を共有する

成長の姿と同時に、コロナ禍に関連した困難な現実や子どもたちの異変を共有しておくことも大事です。共有するときは、良い悪いではなく、「こんな難しさがありますよね。どうしたらいいでしょうか。」と話をしていくことが大事です。

* 新年度に向けた多くの波 *

2.1 新年度に向けた多くの波

- ① コロナ禍の変化の波
- ② 物価上昇など生活困窮の波
- ③ 少子化の波
- ④ デジタル化の波
- ⑤ 気候変動・地震ほかの災害の波
- ⑥ 事件・事故・戦争などの波
- ⑦ G7に関する波 ……………

新年度に向けて、多くの波が考えられます。コロナ禍の変化の波、物価上昇など生活困窮の波、このことも保育・教育に影響してくると思います。さらに、少子化、デジタル化、気候変動・地震などの災害の波。そして、いろんな事件・事故があり、戦争があります。子どもたちは日々の暮らしの中で、「集合住宅にミサイルが打ち込まれた」というようなニュースをずっと見たり聞いたりしています。これが、子どもたちにどのように影響するのか。

一方、広島ではG7が5月に開催されることになっています。G7でいろんなことを話し合うこと自体は大事なことですが、これに関係するいろんな波があると思います。会場に近いところでは学校行事、園の行事ができないことや、交通規制がかかるなど、いろんなことが大きく影響してくると思います。

コロナ禍の変化の波で考えると、ここ1・2週間くらい前から、マスクをどうするのかということがしきりに言われるようになってきました。卒業式や入学式のマスクについてもいろんなことが言われてますが、なかなか微妙な難しい現実があります。保護者や子どもたちの気持ちもいろいろ、一人一人の個性や健康状態もいろいろ、その中でどうするのか。何について、どのように子どもたち、保護者に伝えていくのか。働きかけるのか働きかけないのかなど、とても難しい状況で進もうとしています。

来年度入学してくる子どもたちは、3・4・5歳と、コロナ禍で育った子どもたちです。ほぼ3年間をコロナ禍で過ごしてきた子どもたちが卒園し、入学するということはとても大きなことです。去年も一昨年もそれぞれ難しい状況がありましたが、さらに長い状況の中で、「失われた体験」がある子どもたちが入学してきます。「何ができて、何ができなかったのか」というありのままを共有することが大事だと思います。園所によっても違います。できなかったことが悪いということでも、頑張りが足りなかったということでもありません。「こういうことができたけど、こういうことはできなかった」ということ自体が大切な情報です。具体的には、「自然体験として、以前はこうだったけど、今はこんなことができなくて。でも、ここはちょっとできていて…」という連携が必要だと思います。

3・4・5歳のトータルで見えていった時に、「3歳のときはマスクをするのが難しかったけど、4歳くらいからちょっとするようになりました。ちょっと外すことがあったり、子どもによっても状況は違いますけど。」「お昼の食事の時はマスクをこのように扱ってました。」というような日常

的なことも、貴重な情報だと思います。いろんなことが起きて、難しかったことを共有することが大事です。

* 3歳、4歳、5歳で失われた体験 *

2.2 3歳、4歳、5歳で失われた体験

何ができて何ができなかったのか

人との関わり

マスクの問題

ディスタンスの問題

「密」の問題

一緒に楽しみ創り出す体験の喪失

失われた体験と言語の問題

人との関わりも、特に難しいです。まずは、先ほどから話しているマスクの問題についてです。マスクをどのように着用したのか、しなかったのか。ディスタンスは、どのように取ったり、取らなかったりしたのか。「密」の問題も同じです。そもそも子どもは、小学校の低学年、高学年も、乳幼児はさらにそうですが、互いに関心を持って、密になって、

ひっついていくことが自然です。そのような中でいろんなことを学んでいき、一緒に育っていきます。現在、それができているかもしれませんが、今までとは少し違うのかもしれません。いずれにしても、一緒に楽しみ、いろんなものを作り出すという「一緒にやって楽しかったね」という体験は、全部ではないかもしれませんが、一定部分、あるいはかなりの部分を失われているのではないかと思います。そして、この失われた体験とともに、言葉や数についても、これまでとは違う形で、難しさが一部に出てきていると言われています。先生方自身も、小学校や園所において、子どもたちの様子から感じておられるかもしれません。そういう影響があまりないように感じる子どももいるかもしれませんが、どうかと思う子どももいるかもしれません。



手作りのおもちゃが種類ごとに分けられている写真

これは生活科の学習です。生活科でおもちゃを作って遊ぶときに、それぞれのおもちゃが、どのような面白さがあって、どのようにして作られたのか、どのような動きがあるのかということ整理しています。例えば、この写真は、「つなげてあそぶ」ものを作っています。

「すくってあそぶ」「つり上げてあそぶ」というおもちゃもありました。他にもたくさん種類がありました。このような

おもちゃを作ること、作って遊ぶこと、その遊び方を考える場面で、意識して言葉とつなげるように展開していくことが大事です。園でも、似たようなことはすでにされてるかもしれませんが、できると思います。

* マスク生活とコミュニケーション *

マスク生活とコミュニケーションということで考えてみると、生活場面におけるマスクの着脱、遊びや学習場面におけるマスクの着脱が、これまでどうだったのか、これからどうするのか。今、最終的に決めることはできないと思いますが、どうしたらいいかということを経験するといいと思います。今後おそらくマスクの扱いで、子どもたちに多様な状況が出てくると思います。保護者の気持ちも多様です。それをどのように受け止め、子どもたちに返していくのか。これまでは、どちらかという「マスクをしましょう」という形でしたが、今度は新しい局面に入っていくと

思います。

小学校の低学年や年長さん、年中さんの子どもたちの姿を見ることがしばしばありますが、コミュニケーションに見られる異変を、私自身少し感じています。小学校の教室での学びの様子を見ていても、感覚的な問題ですが、以前とは違うことがあります。

それは「()を見ない子どもたち」ということです。この()に入る言葉は、何だと思いませんか。漢字で書くと一文字、ひらがなで書くと二文字です。「顔を見ない子どもたち」です。もちろん全員ではないです。しかし、一部の子どもたちは、教室で先生が話をされているときに、先生の顔を見ない様子があります。子ども同士が発言して学習が進んでいくときも、発言している子どもの顔を見ないことが、以前より増えているような感じがします。もちろん、原因もいろいろだと思っています。みんなではないのですが、なぜそうなるのかと考えると、マスクをしていることで顔から出てくる情報が限られていることが原因なのではないかと思えます。マスクをすると、顔から得られる情報はほとんどないですね。つまり、顔を見ても表情もよくわからないし、見ても仕方がないということです。声を聞くだけだったら、見てなくても聞こえるわけです。このようなことを3年間で学んでしまっている子どもたちもいるのではないのでしょうか。これは仮説の段階ですが、いるのかもしれないと思います。

そのような状況が見られる中、保育や授業等で、当然、いろんな技術が必要になってくると思います。顔を見ない子どもたちの状況があったとき、一緒に考えて、やってみたりして、手応えがあったかなと思うことを紹介します。引き続きマスクをしている状況があるので、意図的に顔を見るような必然性を作っていくということが必要だと思えます。例えば、何かを提示する、大きな動作をつけることです。あるいは、先生が一番遠いところに立つ、子どもの後ろに立つということです。先生が遠いところに立つと、子どもはそこに向かって話をするとします。自然と教室全体に向かって話をすることになります。他の子どもが聞いているのか、顔を見ているのかを確認するためには、話をする子どもの後ろに立つと、他の子どもたちの顔がこっちを向いているのか向いていないのかはよくわかります。顔を見て話を聞くことは、もともと大事なことです。意識してやっていくとことが、今、必要であるかもしれません。このように困難な現実があり、異変もあります。それを連携の中で共有するというのも大事なことです。

連携により保育・教育の充実を図る

連携そのものが大事ですが、同時に日々の保育・教育の充実に繋がっていくことが大事です。すでに連携が進んでいますので、それぞれのところで実践されていることがあると思います。

* 連携教育の取組の例 *

具体的には、指導要録・支援計画等による連絡や連携。園・学校の便りやWEBによる交流。相互訪問・交流活動。体験入学、保育体験、カリキュラムの共有、合同研修。これらすべて大事ですが、最近見た中で効果的だと思った取組は「WEBによる交流」です。これは時間を合わせてオンラインでということではなくて、コミュニケーションツールを利用した方法です。コロナ禍で、

3.1 連携教育の取組みの例

指導要録、支援計画等による連絡・連携
園・学校の便りやWEBによる交流
相互訪問・相互参観
交流活動の企画・実施・振り返り
体験入学
保育体験等（人事交流）
カリキュラムの編成・共有・接続
関係校園、行政単位での合同研修 …

いろいろなものが使われるようになってきましたが、例えば、Google クラスルームを使った方法です。クラスルームを関係の学校や園所と作り、そこで子どもたちの姿を共有していました。クラスルームは閉ざされた場なので、外部からは見れません。連携している学校・園の中だけで見れるオンラインの場で、子どもの活動の様子を確認できるような写真や動画をあげていました。そこでの子ども

もののエピソードや成長の姿も共有されていて、とても効果的な取組だと思いました。

* 連携を生かした準備・対応・危機管理 *

3.2 連携を生かした準備・対応・危機管理

本園では……！
他園では……？
本園との連携校では……？
本校では……！
他校では……？
本校との連携園では……？

たくさんのお尋ねによる発見と理解

連携を生かした準備・対応・危機管理では、「本園では、このようにしてます。」ということ、同時に「他園はどうされてますか。」ということが大事です。もちろんすべてオープンにするわけにはいかないと思いますし、園ごとに状況は違います。

このような連携があると、園の保護者が「もうすぐ卒園になりますが、自分のところの子どもが入学する小学校

では、マスクはどのようにされているんですか。」という質問があったとき、全部答えることはできなくても、いくらか情報を提供することができると思います。また、すぐに答えることができなかつたとしても、その後連携して、情報を共有し、一緒に取り組んでいくことが安心に繋がると思います。学校であれば、「本校ではどのようにしようか」「他校ではどうかな」という連携です。また、「本校との連携園所ではどのようにしてたのか」という点も同様です。

連携の仕組みがない10年前は、このような連携はとても難しかったです。壁があって、そもそも連絡することがはばかられたり、どんな人がいるかわからなかつたりした状況でした。

今、まさに連携の仕組みができていく状況ですので、それを生かしていくということが大事になると思います。知りたい情報は、たくさんあります。お互いにたくさん情報を共有して、「どうでしたか」「こうしてました」と、遠慮なく可能な範囲で尋ねたり、話をされたりすることが、子どもたちの安心や成長に繋がっていくと思います。そのときに「どうしてそういうふうにされてたんですか。」という理由の共有も大事です。行う事象だけでなく、行う理由に大事な部分がありますから、それも含めて共有することが大事です。

3.3 カリキュラムと実践の要点

①遊びや学習における自己選択で思考

「考えるとき」「考えないとき」

②自己発揮が生まれるカリキュラムと実践

それぞれの経験が生きる展開

子ども観、授業観の再確認

③実践上の留意点とカリキュラムへの表現

たとえば →

* カリキュラムと実践の要点 *

カリキュラムと実践の要点についてです。園でも、学校でも同じですが、遊びや学習における自己選択で思考は生まれます。大事なことは、自己発揮が生まれるカリキュラムと実践、そして実践上の留意点とカリキュラムへの表現についてです。

③カリキュラムへの表現		
遊び ねらい 経験内容	協力して取り 組む気持ちを持 つ。 冬の生活や自 然、遊びに関 心を持つ。 友達と相談し ながら遊びを 展開し、思い の遣いに気付 いたり一緒に する楽しさを味 わったりする。	安心タイム 生活科を 中心とした 合科的・関 連的指導 特別活動 授業実践 にあたり (留意点)
		歌 てあそび … 国語科 音楽科 体育科 生活科 図画工作科 学校○○ 学級の係 給食 … 「どうするか」など活動 向かう問いを意識する。 既得の知識・経験を踏ま えて、それぞれの自己発 揮により学び合えるよう にする。

これは、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムのごく一部だけを取り上げています。スタートカリキュラムをするときに、生活科を中心とした合科的・関連的に学ぶ安心タイムでは楽しくしたけれど、通常の授業になったときに、切り替えるというのでは残念です。切り替えるのではなくて、合科的な授業の原理を他のいろいろな授業に生かしていくことです。子どもたちがすでに持っている知識

や経験を踏まえた授業になっていくこと、合科的な時間と教科の授業の時間が分離しないようにすることが大事です。これはカリキュラムには表しにくいので、ここをどのように伝えていくかということが大事かもしれません。

* 豊かな保育・授業・生活の創造 *

3.4 豊かな保育・授業・生活の創造

- ①安心して過ごせる 本人の気持ち
寄り添う人々
事物・環境・制度
- ②本物の環境がある 自然・事象・芸術・伝統
- ③自由・選択肢がある 自己決定の場



豊かな保育・授業・生活の創造ということで、安心して過ごせることはもちろん大事です。本物の環境があることも大事です。さらに、自由・選択肢があること。自己決定も大事です。遊びはそもそもそうですが、授業においても自由や選択肢があることが、考えることに繋がってきます。

これは小学生が生活科で育てたスイカです。スイカにしてはかわいらしいです。しかし、この手の使い方、この手で守っている様子を見ると、これがいかに大切なものなのかということが伝わってきます。これは、自分たちが育てようと思ったスイカです。学級のみならずスイカを育てるということではなく、自分たちのグループはスイカを選んで育てようとした

から、こうなるのですね。そこに、大事なことがあると思います。

* 大切な毎日を過ごすこと *

3.5 大切な毎日を過ごすこと

- なんでもないこと、
当たり前に思えることが、豊かな暮らし。
- 何かがあると一変する。
一日一日が大切な日。
- 「今」を犠牲にした未来はない。
- 「今」をおろそかにした未来もない。
- ※これらを可能にする諸条件の整備が重要

なんでもない当たり前のことが、豊かな暮らしです。何かがあると一変します。1日1日を大切に過ごしたいと思ひますし、「今」を犠牲にした未来はなく、「今」をおろそかにした未来もないと思ひます。

今こそ、連携の仕組みを最大限活用して、成長の原点にある「知りたい」「わかりたい」「やってみたい」「できるようにになりたい」「面白い」「楽しい」「幸せ」などから生まれるチャレンジを、一緒に援助、支援、応援していきたいものだと思います。